大川の水

芥川龍之介

自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎の若葉におおわれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中学を卒業するまで、自分はほとんど毎日のように、あの川を見た。水と船と橋と砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮しているあわただしい人々の生活とを見た。真夏の日の午すぎ、やけた砂を踏みながら、水泳を習いに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のにおいも、今では年とともに、親しく思い出されるような気がする。

自分はどうして、こうもあの川を愛するのか。あの

どちらかと言えば、泥濁(どろにご)りのした大川のなま暖かい水に、限りないゆかしさを感じるのか。自分ながらも、少しく、その説明に苦しまずにはいられない。ただ、自分は、昔からあの水を見るごとに、なんとなく、涙を落したいような、言いがたい慰安と寂寥(せきりょう)とを感じた。まったく、自分の住んでいる世界から遠ざかって、なつかしい思慕と追憶との国にはいるような心もちがした。この心もちのために、この慰安と寂寥とを味わいうるがために、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄(もや)と青い油のような川の水と、吐息(といき)のよう

な、おぼつかない汽笛の音と、石炭船の鳶色（とびいろ）の三角帆と、――すべてやみがたい哀愁をよび起すこれらの川のながめは、いかに自分の幼い心を、その岸に立つ楊柳（ようりゅう）の葉のごとく、おののかせたことであろう。

この三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林（ぞうきばやし）のかげになっている書斎で、平静な読書三昧（さんまい）にふけっていたが、それでもなお、月に二、三度は、あの大川の水をながめにゆくことを忘れなかった。動くともなく動き、流るるともなく流れる大川の水の色は、静寂な書斎の空気が休みなく与える刺戟（しげき）と緊張とに、せつないほどあわただしく、動いている自分の心をも、ちょうど、

長旅に出た巡礼が、ようやくまた故郷の土を踏んだ時のような、さびしい、自由な、なつかしさに、とかしてくれる。大川の水があって、はじめて自分はふたたび、純なる本来の感情に生きることができるのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやわらかな風にふかれて、ほろほろと白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜(よ)に、暗い水の空を寒むそうに鳴く、千鳥の声を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、ことごとく、大川に対する自分の愛を新たにする。ちょうど、夏川の水から生まれる黒蜻蛉(とんぼ)の羽のような、おののきやす

い少年の心は、そのたびに新たな驚異の眸（ひとみ）を見はらずにはいられないのである。ことに夜網（よあみ）の船の舷（ふなばた）に倚（よ）って、音もなく流れる、黒い川をみつめながら、夜と水との中に漂う「死」の呼吸を感じた時、いかに自分は、たよりのないさびしさに迫られたことであろう。

　大川の流れを見るごとに、自分は、あの僧院の鐘の音と、鵠（くぐい）の声とに暮れて行くイタリアの水の都――バルコンにさく薔薇（ばら）も百合（ゆり）も、水底（みなそこ）に沈んだような月の光に青ざめて、黒い柩（ひつぎ）に似たゴンドラが、その中を橋から橋へ、夢のように漕（こ）いでゆく、ヴェネチアの風物に、あふるるばかりの熱情を注いだダンヌンチョの

心もちを、いまさらのように慕わしく、思い出さずにはいられないのである。

　この大川の水に撫愛（ぶあい）される沿岸の町々は、皆自分にとって、忘れがたい、なつかしい町である。吾妻橋（あづまばし）から川下ならば、駒形（こまかた）、並木、蔵前（くらまえ）、代地（だいち）、柳橋（やなぎばし）、あるいは多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸――どこでもよい。これらの町々を通る人の耳には、日をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、格子戸（こうしど）づくりの薄暗い家と家との間から、あるいは銀茶色の芽をふいた、柳とアカシアとの並樹（なみき）の間から、磨（みが）いたガラス板のように、

青く光る大川の水は、その、冷やかな潮のにおいとともに、昔ながら南へ流れる、なつかしいひびきをつたえてくれるだろう。ああ、その水の声のなつかしさ、つぶやくように、すねるように、舌うつように、草の汁をしぼった青い水は、日も夜も同じように、両岸の石崖(いしがけ)を洗ってゆく。班女(はんじょ)といい、業平(なりひら)という、武蔵野(むさしの)の昔は知らず、遠くは多くの江戸浄瑠璃(じょうるり)作者、近くは河竹黙阿弥翁(もくあみおう)が、浅草寺(せんそうじ)の鐘の音とともに、その殺し場のシュチンムングを、最も力強く表わすために、しばしば、その世話物の中に用いたものは、実にこの大川のさびしい水の響きであった。十六夜(いざよい)清心(せいしん)が身をな

げた時にも、源之丞（げんのじょう）が鳥追姿（とりおいすがた）のおこよを見そめた時にも、あるいはまた、鋳掛屋（いかけや）松五郎が蝙蝠（こうもり）の飛びかう夏の夕ぐれに、天秤（てんびん）をにないながら両国の橋を通った時にも、大川は今のごとく、船宿の桟橋（さんばし）に、岸の青蘆（あおあし）に、猪牙船（ちょきぶね）の船腹にものういささやきをくり返していたのである。

　ことにこの水の音をなつかしく聞くことのできるのは、渡し船の中であろう。自分の記憶に誤りがないならば、吾妻橋（あづまばし）から新大橋までの間に、もとは五つの渡しがあった。その中で、駒形（こまかた）の渡し、富士見の渡し、安宅（あたか）の渡しの三つは、しだいに一つずつ、いつとなく

すたれて、今ではただ一の橋から浜町へ渡る渡しと、御蔵橋（みくらばし）から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のままに残っている。自分が子供の時に比べれば、河の流れも変わり、芦荻（ろてき）の茂った所々の砂洲（すなず）も、跡かたなく埋められてしまったが、この二つの渡しだけは、同じような底の浅い舟に、同じような老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のように青い河の水を、今も変わりなく日に幾度か横ぎっているのである。自分はよく、なんの用もないのに、この渡し船に乗った。水の動くのにつれて、揺籃（ゆりかご）のように軽く体をゆすられるここちよさ。ことに時刻がおそければおそいほど、渡し船のさびしさ

とうれしさとがしみじみと身にしみる。——低い舷の外はすぐに緑色のなめらかな水で、青銅のような鈍い光のある、幅の広い川面は、遠い新大橋にさえぎられるまで、ただ一目に見渡される。両岸の家々はもう、たそがれの鼠色に統一されて、その所々には障子にうつるともしびの光さえ黄色く靄の中に浮んでいる。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張った伝馬船が一艘、二艘とまれに川を上って来るが、どの船もひっそりと静まって、舵を執る人の有無さえもわからない。自分はいつもこの静かな船の帆と、青く平らに流れる潮のにおいとに対して、なんというこもなく、ホフマン

スタアルのエアレエプニスという詩をよんだ時のような、言いようのないさびしさを感ずるとともに、自分の心の中にもまた、情緒の水のささやきが、靄の底を流れる大川の水と同じ旋律をうたっているような気がせずにはいられないのである。

けれども、自分を魅（み）するものはひとり大川の水の響きばかりではない。自分にとっては、この川の水の光がほとんど、どこにも見いだしがたい、なめらかさと暖かさとを持っているように思われるのである。

海の水は、たとえば碧玉（ジャスパア）の色のようにあまりに重

く緑を凝らしている。といって潮の満干（みちひ）を全く感じない上流の川の水は、言わばエメラルドの色のように、あまりに軽く、余りに薄っぺらに光りすぎる。ただ淡水と潮水（ちょうすい）とが交錯する平原の大河の水は、冷やかな青に、濁った黄の暖かみを交えて、どことなく人間化（ヒュウマナイズ）された親しさと、人間らしい意味において、ライフライクな、なつかしさがあるように思われる。ことに大川は、赭（あか）ちゃけた粘土の多い関東平野を行きつくして、「東京」という大都会を静かに流れているだけに、その濁って、皺（しわ）をよせて、気むずかしいユダヤの老爺（ろうや）のように、ぶつぶつ口小言を言う水の色が、いかにも落つ

いた、人なつかしい、手ざわりのいい感じを持っている。そうして、同じく市(まち)の中を流れるにしても、なお「海」という大きな神秘と、絶えず直接の交通を続けているためか、川と川とをつなぐ掘割の水のように暗くない。眠っていない。どことなく、生きて動いているという気がする。しかもその動いてゆく先は、無始無終にわたる「永遠」の不可思議だという気がする。吾妻橋、厩橋(うまやばし)、両国橋の間、香油のような青い水が、大きな橋台の花崗石(かこうせき)とれんがとをひたしてゆくうれしさは言うまでもない。岸に近く、船宿の白い行灯(あんどん)をうつし、銀の葉うらを翻す柳をうつし、また水門にせかれ

ては三味線（しゃみせん）の音（ね）のぬるむ昼すぎを、紅芙蓉（べにふよう）の花になげきながら、気のよわい家鴨（あひる）の羽にみだされて、人けのない厨（くりや）の下を静かに光りながら流れるのも、その重々しい水の色に言うべからざる温情を蔵していた。たとえ、両国橋、新大橋、永代橋（えいたいばし）と、河口に近づくに従って、川の水は、著しく暖潮の深藍色（しんらんしょく）を交えながら、騒音と煙塵（えんじん）とにみちた空気の下に、白くただれた目をぎらぎらとブリキのように反射して、石炭を積んだ達磨船（だるまぶね）や白ペンキのはげた古風な汽船をものうげにゆすぶっているにしても、自然の呼吸と人間の呼吸とが落ち合って、いつの間にか融合した都会の水の色の暖

かさは、容易に消えてしまうものではない。
　ことに日暮れ、川の上に立ちこめる水蒸気と、しだいに暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、ほとんど、比喩（ひゆ）を絶した、微妙な色調を帯ばしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘（ひじ）をついて、もう靄（もや）のおりかけた、薄暮の川の水面（みのも）を、なんということもなく見渡しながら、その暗緑色の水のあなた、暗い家々の空に大きな赤い月の出を見て、思わず涙を流したのを、おそらく終世忘れることはできないであろう。
　「すべての市（いち）は、その市に固有なにおいを持っている。フロレンスのにおいは、イリスの白い花とほこり

と靄と古（いにしえ）の絵画のニスとのにおいである」（メレジュコウフスキイ）もし自分に「東京」のにおいを問う人があるならば、自分は大川の水のにおいと答えるのになんの躊躇（ちゅうちょ）もしないであろう。ひとりにおいのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我が愛する「東京」の色であり、声でなければならない。自分は大川あるがゆえに、「東京」を愛し、「東京」あるがゆえに、生活を愛するのである。

（一九一二・一）

その後「一の橋の渡し」の絶えたことをきいた。

「御蔵橋の渡し」の廃（すた）れるのも間があるまい。

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店
　　１９５０（昭和25）年10月20日初版発行
　　１９８５（昭和60）年11月10日改版38版発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年1月11日公開
２００４年3月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。